李袁通紀

四六

戰記

姫

内閣文庫
和書
類
三四七〇九
號
三三
冊
一五一
函
七
架
(七廿七)

第七

共世三

内閣文庫
番號 和 34709
冊數 33 (27)
函號 151 60

閲
285

盛衰通紀卷第廿六

目録

秀吉西海ノ賊ヲ平用ヒラル事
秀吉伊奉行ヲ刑ス事
秀吉小弟權輔ヲ誅ス事
小弟都尾張ヲ評定付法城ヲ配ス事
秀吉小田原ヲ發付山中薬山ヲ城巡見ス事
氏政ヒヽ自向付東八州城ヲ攻龍ヲ於軍ス事
上州松枝城攻大石ヲ降ス并城ヲ没ス事
徳川殿軍ヲ見付氏政ヲ降ス事
酒匂川伏ス付而記ス事

山中城責付為去候

薬山城軍候

野州佐野城没落候

再薬山城責之事

秀吉ハ向小田原付陣ハ責口を配候

伊達政宗茶小田原付陣中雑説候

茶秀吉ハ大勇候

武州松山城降参付沼城没落候

武州鉢形城降候

相州玉縄城主小笠氏降参候

上野国銚子城城責付城去降参候

以上

秀吉薨去行幸用意之事

神武丙辰より天正十六戊子まで百九代星霜二千二百三十七年なり今上は天正十四丙戌十月廿五日十六歳にて即位なり後陽成院と申奉し時分なりて例なき重位なり玄孫天正十三乙酉春内野に城営成らるゝ聚楽と名付る行幸を勧め奉ん為なり是去年九月十八日大坂より聚楽へ移御し諸侯兼金銀の積る大船数百艘淀へ着し車五百輌人歩五千餘人まで京着せり秀吉此度ひとすじて月日雲霞諸侯淀迄相迎まで出て車馬道を埋ひなり扨行幸此用意ハ

院の御所も檜皮葺 御構乃前に御輿寄あり 庭上に舞
台をうちおき左右の楽屋あり 諸宮の局よりまのあたり見物なし
花見なとし 扨行幸の式は古より度々其式多けれども 是者ハ
小山殿の応永十五年の例 室町殿永享九年の例を用ひられし
とかや 鳳輦牛車の事も久敷絶えられて 卿人定かならぬ諸家の
記録も相しが 徳善院玄以所司代 諸家の記録を考へ 旧室の
識者を幾年求く始めしとかや 卯月十四日に定り 其日に
至りて 禁中ニハ 末々の職事まことく具し 先奏し
到着殿ニ出御なり 御装束ハ山鳩色とかや 御殿より長
橋の御後まで 筵道をまいる 殿下御裾を取る 陰陽乃頭 反(へん)
閇(ばい)をつとむ 出羽の巻 雅楽乃巻も例のごとし 殿下笏を鳴して

勅答のよしを告奉る 御剣を頭中将慶親朝臣 御草鞋を
頭の弁光房朝臣 鳳輦を御階乃前に寄侍りて 左右の
大将御綱を取 例のごとく四ツ足の御門を北へ 正親町西へ
聚楽乃亭まで 十五丁の間 辻固の武士六千余人 数輩を並
太刀を持して 路を隔 左右に蹲踞し侍り

行幸供奉行列之事

一 先 行粧一番に 烏帽子着の侍数百人 二行に並 其次に 御母
准后 女御乃御輿を初として 大典侍(すけ) 御局 勾当 女中の車 輿
五十余挺 其下それぞれ 御輿添へ 百余人 衣冠の人々 童姿 追
大方雨にて装束まかりて 塗輿にて供奉せるハ 六の宮 御方
伏見殿 九条殿 一条殿 菊亭右大臣晴季 徳大寺内府公維(これ)

北畠井西相雅書曰近西相云寺勅願寺西相時豊大炊御門
経郷中山西相親綱ハ山人ニハ陸奥島帽子ニ布衣の
侍雅楽笠持ハ具セラレタル前駆八留ハ陸奥馬伯秀西相陸
伯爵家隆冷泉侍従為親西園寺相国柳原資明右衛
資濃甘露寺権弁経豊勅願寺権弁光豊左馬助久脩
民部少輔伯爵秀況能茶陸伯爵
右兵衛佐時英文章ハ唐橋秀方義人或ハ大蔵卿伯爵
泉伯爵茂原左馬清原秀実改名持吉田侍従兼治大炊
侍従庭田侍従綱光廣田侍従重定烏丸侍従光度日野弁資勝
葉室頼人弁郷宣三条ハ為実隆尼近衛左馬頭元仲公条大内記
為良次ハ色清ハ次為ハ園ハ為基縄六条中将有親
四辻中将季海右ハ四条ハ為隆富小路ハ為氏成高井
中将雅綱二行ハ列ニ次ハ賀茂小路弁充房中山
江中将慶親次ハ大将右衛門督西相信房ハ陸奥島帽
子若ハ侍ハ副雅色笠持ハ従ハ右ハ西園寺西相実益ハ
従者同ハ家なり次ハ俗人四十五人巻安城東次ハ乱輩
ハ後加輿丁次ハ六位和紀已下ハ役人ハ尾従ニ式部ハ
色和ハ大臣ハ為京伝浦ハ陸奥ハ為陸奥
雅色笠持ハ従ハ次ハ徽田内府信雄従者上ハ同ハ次ハ烏丸
大納云光定卿日野新大納云輝資久秋大納云教高陸奥
大納云　家慶ハ大和大納言豊長秀ニハ持明院基孝ハ
庭田源中納云重通ハ正親町侍中納云季秀ハ廣橋中納言兼

勝ヲ坊城中納言式ヲ大納言長ヲ江中納言秀次ヲ豊臣
菊亭三位中将季栄ヲ中山院宰相親雅ヲ三条宰相公仲ヲ吉田
左兵衛督兼見ヲ高倉右兵衛督永孝ヲ侍従の宰相宮内卿秀親ヲ
左次ヲ関白大政大臣秀吉公宗興なり左次ヲ次ヲ前駆乃馬上
二行ヲ列ス左行列先左ハ博田右馬尉福原右馬助長谷川右兵
衛尉左ヲ助右田左弾ヲ川ヲ馬首池田侍中ヲ堀田
景書助中川武蔵守伊藤丹後ヲ言田豊後ヲ小牧木瀬左助ヲ野
花人左蔵田相模ヲ安成掃部ヲ一柳越後ヲ平野大炊助溝口伯耆ヲ
右牧下野ヲ張弾正家女ヲ赤松左兵衛尉石川出雲ヲ中川右兵衛
左ヲ犯ヲ木下侍中ヲ市橋下総ヲ九鬼大隅ヲ生駒主殿頭
徳田掃部頭左ヲ郡豊後ヲ尼子高内少輔ヲ多賀谷大膳大夫芝山
監物稲葉左庫頭ヲ留田左ヲ牧監ヲ野 仕馬ヲ也右ヲ留治ヲ補
大ヲ刑部少輔山崎右京ヲ行相左ヲ行相左ヲ振坂中務少輔依羅隠岐ヲ
行相右ヲ市正生駒隠岐ヲ電服ヲ右ヲ伝ヲ言留石見ヲ谷ヲ相ヲ
田中石見ヲ石川備後ヲ石田隠岐ヲ小西摂津ヲ石川伊賀守
松浦壱岐ヲ薄田ヲ狭ヲ寺沢城中ヲ村上周防ヲ書山伊賀ヲ
吹石左ヲ山崎右ヲ広屋隠岐ヲ南条伯耆ヲ川尻紀伊ヲ
長谷ヲ牧ヲ牧左ヲ村左ヲ補古田織部正別所左ヲ正ヲ新左隠岐ヲ
奥山休波ヲ博屋大隠ヲ又 松浦左京亮津田集人正本村右隠ヲ
赤地左ヲ雑色左右に二十人左隠ヲ六人胡簶ヲ太具ヲ
左ハ表民部大輔野村紀伊ヲ木下左京亮太ハ荷田左ヲ中務
左ヲ東府速水甲斐ヲ左次ヲ布衣胡簶後ヲ具して三行ヲ

並びに右は一柳右京大夫中ハ右同本立沢右は小出信濃守
何も立烏帽子指衣を着せ申候次第牛二疋轅指皆指
弐人牛童毎人髪を下け眉を作り赤き水干の装束せり
牛ハ紅絹縫くるを着せ牛面をうけ角をハ金箔をもいく
濃き淡き九条皆を紅の絹を付しうち古例ハ有りとやを沢ハ
車副清皆指笠指烏帽子着て麿て五百人三行に列し市り
次ハ加賀加賀利家新色布衣の侍烏帽子着て副笠指
おろうろ光ようり小下侍の軍陣同し左沢ハ宗津の侍従織田
信兼丹波守将監長秀指三河守徳川秀康三吉侍従織田
秀信金吾侍従秀秋清虎侍従義康東山侍従長
谷川秀一小ノ新侍従婚秀政松浦侍従蒲生氏乙松任侍従

丹羽長重波奥侍従池田輝政豊前侍従大友義統伊賀侍従筒井定次金山侍従森忠政井伊
侍従直政丹後侍従細川忠興河内侍従毛利秀頼　侍従織田
長益城中侍従前田利長越加賀侍従蜂屋頼隆京極侍従務
侍従小早川侍従長谷川秀頼之親皆馬上にて供を付この侍ハ皆
数を乗り馬上の装束ハ色々地ハ四季花鳥唐織深ケ
織立紋縫箔或ハ置ハ錦縫箔錦足に目をおと
ろうせり
風輦沢ハ清車ハ乗せまゐに太太言時乗ス清車乃清
簾を巻ハ高ハ上れハ下清ハ乗せ行ハ万里小路殿ハ充房裾
を元内へ成ハ乗る上達部殿上人侍宣乃外ハ徒ひ侍へ

殿下まも四つ足門を入給ひしかば程なく上り給ひぬ
付き給ふ時袴を脱ぎ給ふ事みな作り立つて清涼殿を
立ちはしりて退出し給ひ又清涼の裳束を改め清涼殿
に出て殿下まゐ給ふ事なり殿上人の配膳乃
所清涼の西廂町に東宮中務の宮仲平の宮の清涼の北の廂
右の方光豊朝臣関白殿竹園桜嘉清花大臣の清涼の
西洞院左兵衛佐時雨丞右兵衛大尉記為良四位左兵衛中将
重頼朝臣井左兵衛督中将雅綱六位左兵衛中将有親朝臣
左兵衛実勝右近衛左馬頭元仲右也月の出の清涼に水無瀬殿
御所民部卿出つ左馬頭久俊四位近衛左兵衛督小路
右兵衛佐秀世朝臣清涼の北加茂の社の清涼殿
右方の三献右天皇天盃献上あんて皇香盒七献まは
清剣清涼殿にあり左の出者某物美食沼の作り花蓮葉
乃源氏長慶乃ようひ相行の員に准へ殿上人清涼
殿りて西表へ清凡帳をあさせるひ敷設あり左右殿の
管絃あり一番右常楽二番鄙曲三番大平楽琴の琴
清所の位左和琴左大臣一条殿四位近衛中将
敦宗井中将ひと左人琵琶の座作り殿菊亭右府同三位
中将ひと三人笙の座大炊御門大納言伯二位右近衛左馬頭ひと
三人再聲声右四位近衛左馬頭ひと三人まて
徳是北辰椿葉陰二改　尊尚南面松花色十回
引つゝしく内を明給しまひぬ清涼殿色目お殿小殿も御

文明まに殿下も退き寝殿へ入給ふ毋屋の形状をまゝの
事為いと面白し聖教八石仏とく為りて教授し給ひとく
儀の出而まは三日の遊山終て還幸なり[illegible]と為ての定
為しう出御乗色至くおわす御帰社にく還幸し
給ふ生涯の行幸絶式後世よ我心を後世為まりて別庭深
栄えまふやゝにと祝し給ふ依て禁中正税の為よ清中の
地まおとくく未代よりう御遠なく厳務として年納仕と
立清水御一行の事

一京中銀地子五千五百三十五余石為禁中御断所事
一米地子八百石之内 三百石院御所 五百石六宮関白領
一於江州高島郡八千石法門跡諸公家庭へ至て太如件

御年貢之懈怠し掌於者之為 叡慮御計に殿山様に
仕之者也

天正十六年卯月十五日

菊亭殿
勧修寺殿
中山殿

三度御家社御参詣ありて家松祝御制法に九十文首之枝藤
殿て 三之八御参せ[illegible]御同家の相撲ありと数くよ
して出いと面白ありう翌十七日は伶人の舞十八日還幸なり
供奉の行粧行幸に同一日おなりける事様なり

秀吉小地松京楽社湯の事 付分賜金銀子

法住寺殿事

四年十月秀吉小田原より帰陽を催し給ふ節
堂々の茶を好む輩が風情と又茶室の吾無を見んと
為とや吉は京堺を始め西国のかの中より代官をもくこの
方は恢ひ出とく多く所つまる秀吉は而国代官より千
宗易に任せ数寄のこの三百五十餘人を召んて小田
よ舎を假の茶屋を多く拵数寄金銀を出ゆやを
茶屋如新して秀吉好見給ふ古来名物を数を尽し
て後秀吉一つ此茶屋に入るに年五十有余此信長
秀吉茶を点ふ為とおくへく樹上より一瓢をとりて
鶴瓶より焦(こげ)瓶を出してお出給たてく秀吉へ出くむ
秀吉その清潔を称し者後なるを感せられ平後
京へ帰りて聖母を秀吉御別有馬へ湯治して吉蛟二百
貫を有馬の里中へ下給ふ又宝自身は秀吉庫中
の金銀をおとく多く出こ為法名に与へらるてうは又その
主人なる出羽殿人より多与へ秀吉は今我天下を
掌握し金銀府庫よりの不用と云ふ尾石に同し人よ
与へ為ぜんまはとてはけ与ら出帝り古今の将軍法好
金銀此海るよりも強ぶるん為にかくはるひ事は上古
より一人なりこと後又金銀をちけ出ハ又義より出こ為
与ふる一世此中に為度まく府庫を空して与へらま
しう其金銀に之数なるなるし御よ下給ふ為て数寄を

志れる大器うみとぞかんけり

秀吉小牧確執澄觸事

秀吉天下をしれども小牧乃を志くゝいを彼小牧を
清盛の八男資盛の末し

私ゝ資盛は小松殿ゝ二男し清盛ゝ八男ゝは不審仕し
如書のあやまりう

伊勢新九郎といひゝ備中まゝ三百貫ゝ所領をもて、
康正三年遠州へ住て武勇を聞へ長孫
二年十月華山の城主となり翌年い豆州の大敵を滅し
一国平均ゝ後小田原北城をせめ取れり上杉とうち
あひて後ゝ伊豆相模武蔵ゝ上野下野安房ゝ上総下総ゝ八州を
領して今氏直まゝ五代猛威を奮ふゝ上新威を不恐諸侯
の使ゝあなどる秀吉ゝ使ゝ津田集人ゝ伝奉ゝ家田左を招
負言を使ゝして来内を乞小牧父子うけがひなゝ
上洛せず伝て秀吉国ゝ帰れ即ち来出るあゝしと
て主用云なり

来藝国来陳清陳役ゝ事

去歳内来役中国ゝ人役英ゝ国国
自坂利尾列六人役
小国六人来役を列ゝ列清列甲列伝列氏ゝ七人役
右仕軍役ゝ旨来書ゝ月廿日令和陳攻平放小田原
小牧ゝ忠勤者也仍如件

天正十七年己丑十月十日　秀吉御判

右のごとく江州水口城を長束大蔵大輔に
正家を株梁として下知ありて十人を定め年内より代官ども
米二十万石請取て来春早々舟積強別江戸清水へ
差和し彼石より蔵を作り入置て兵軍勢へ渡し又黄金
一万枚まて伊勢尾張三河遠江駿河武蔵国の米を調へ
小田原ちかき湊へ差置させらるべく下知せらるべし十一月上旬より
軍勢催さるべし

武軍勢澄觴ハ去る天正十年信長生害の時甲信両国を
ぬき国と城を徳川殿甲州へ乗入し信長の臣川尻
肥後を討て甲州を押領せし浅野弾正忠に彼国を信人
大村三郎左衛門尉伊賀守なる者范小原方なる城かくと
通せし故北条出馬して那内を討れ[illegible]に陣し
徳川殿と対陣しける処に氏政の弟鉢林坊城を小原
黄濃守氏規ハ先年今川氏真駿河の守護の氏規を
家康ゆとはあひく交見まひし故武田氏規を持く
和平のゆをを中武田ら治国の内甲信の両国を徳川殿へ
渡し上野国をハ小原へ領し[illegible]上総を[illegible]の甲州
那内をも渡し東海ら[illegible]氏政より中ならは上州
の内沼田領を徳川殿北條軍[illegible]田信幸領して小原へ[illegible]
さ[illegible]下知なるへしとの使なり　家康ゆ[illegible]武田へかくと
伝あれハ異地なくてハ叶ふ間とゆふ　家康ゆ者分

碧地方へ退て沙汰せんと申されハ真田申ける者信州
川中島四郎上杉景勝押領せ是を伝聞が力に切て
あれハ隙なくしと思ひ給れ共徳川殿と秀吉と
小牧長久手の合戦後いまだ和平なる時なる故秀吉と
いふ大敵有るゆゑ又上杉と軍せんとを考へて只沼田を
相渡し上田城を知行せよ立て碧地を沒さんとの謀
あれハ真田殿より張報する故家康公より大勢を以て
せめられても強て難儀せるけれ共秀吉天下を
取て徳川も小牧も秀吉と和睦しれハ氏政の代にて
小牧長沼田領を給ハる〳〵と聞られハ秀吉同心し
国境ハ味方沼田領を渡〳〵られハ老臣を差上せ先方も
退て上洛せ〳〵と返すし給ハ小牧長久手陣定所坂迄
江雪斎を差上せ沼田領を請取ける沼田は内藤久
蔵殿と云ふ知る真田代の墳墓の地なれ共是は真田
殿ハ〳〵を邪ハおとなく〳〵小牧なる配よゆるさず小牧父子
上洛す〳〵とあるしに江雪斎来る十二月に上洛せ〳〵と
約束して小田原へ帰りける此時武州神尾城を小牧
安房守氏邦より沼田をあて〳〵高氏邦の城とせりあて氏邦
ゟ従軍供候能出来ぬ範忠といふものいのまた小太郎 兼て
名久留美城をうんと云ひ花信濃守来し
いるゝ武士よて後の城主もう〳〵是を以て後の城主を定めて
名久留美城をせめ取て真田ゟ云伝退出 沼田領を

小牟禮屬しかり太田大よ
いうて去れ法も明王院を使として上洛せんと中により沼田
ともに沒せ而よ上洛せを剃名久留米をせめ給る之羅
城ろ江い捨き退治せんと用意せ之小牟禮ハ石巻
表ろ加藤廉昌をかゝ上洛近江ハ氏重病氣なりまゝ
名久留米乃ろ帰ホの卒急ゝ為うて返を仕と色く
陳しかれども秀吉聞ハ給く使を石巻を宇倉せしめ
小田原へハ花篭を以く雖歎をうけ洛を促しれり天正
十七年十一月廿四日秀吉より状をもく氏政氏重又ハ
氏政を せめ給う小牟禮又ハ氏重ハ 大ホを
脇ゝるをかゝく軍乃評義もせさりあり

小牟禮老臣誅定付城城を配乃る

天正十八年正月二日小牟禮ハ寄合を（小牟禮ハ毎月二日十七日毎度り寄合
なり而 公文而よ集るゆゝハ伊勢伯耆守昌景大和守頼時親
小牟禮播磨守 長篠松田尾張守 康秀同紀伊守 秀範山角上野
定方同紀伊守定勝芳賀伯耆守 信可安房豊前守正重 長江
豊前守坂部 この時松田尾張守 病氣故頼 在せり秀吉去年
よりの軍用米乃をのへうこと一こに中上給ゝしとて武時
小牟禮又ハかくと中あれハ大老松田尾張康秀ハ秀吉いうよ
ゝふとも叶ハ難 去ゝくの長途といひ殊ハ大井川若根乃
難而ハ雖永ハ建武ハ 東八ヶ国の云ハ
日本國ハ 射を 何程乃ゝうあらん又云報の事も不慥事も

是はくいひめ[illegible]て小牟禮を降参させん為なるべしといふ
よりて当日の評定は四方にて長秀吉おなじの事慥よ
守えて小牟禮も主用云とて先名根山中の城に岱伝を
充入て要害を築りり（此城時は和泉の国なり）の此城よりは松田尾張守殿の
松田右衛門尉清秀の数手おもしろ今度は小勢よりて叶ふ
まじとて相別其縄城を小牟禮に為秀氏猶美に月毛豊前守好言
胡金能光を京洛を加勢を給ひ[illegible]正月廿三人を招き
小牟禮又ふにく中後酒をすめく氏猶よ兼氏の刀月毛に出吉
の刀胡金よ組美を切させり此城は上方勢に始せく不の事一
乃場なりを長北蓋城数手は武勇此時なるべしとやさ
月毛は討死して名は上くべし降参のるは石ひもよりて法心

を労し降ふあるといひく席をとり河部金は席を立て東待へおて
いさりは小牟禮の城を攻うし又山中の城要害もよりぬ
にいりく大敵を防へを加る必死の地へ親族若臣を遣れ
一向討死せしもを手小牟禮は降参あるく如は松田尾張
好曲より記る敵を秀吉は言ふあるに松田なり部の亡ん時は
いけもらく放ものもされは松田の切腹も今川の三浦右馬よ
習るを京洛は山中まおもるとも生死極めるた部金が
分乃とも氏猶よ捨んとて東侍を出るを又二月十六日
彼林城を小牟氏紀を石蔵て豊州蓮山城へおもり移へとふ
氏紀は去手来和平を津く誘ひしまは上洛も形く好曲の松田
中を用給ひ氏紀は記る従軍根るの毎く軍もりく

一切じ来はいかゝくも氏政はれ也枝をれハ今のあん程を
ゆハ為されます蓮山の安房ハ氏綱の弟也にて〳〵と虎言
して立まゐり

秀吉小田原を発ず山中蓮山を巡見る

諸出へハ天文十八年三月朔日を発と稱也しかハ去歳内
南海山陸山湯山陸及を江尻黄瀬伊賀の云二十二万餘人全京
徳田信雄伊勢尾張の云一万五千人 駿河大納言家康ハ三河
遠江駿河甲斐信濃の勢二万五千人 去日討立て先陣既ま
駿州富士川根方由井蒲原を にうち〳〵れハ後陣ハいま
黄瀬尾張まで〳〵うされとも都合四して駿河の宿〳〵
いさゝうさりあり 京都聚楽の留守居ハ毛利輝元

四万人まく紀伊国ハ輝元の臣吉川廣家ハ一万五千人まく
泉川摂の留守ハ別所吉治を 中国小早川隆景と安国寺とハ
二万人まく小田原へ向ひ 大将軍秀吉ハ四月十九日京都を
立て 弥富実形ハ 作りひ者にう者 馬〳〵 大刀 衣裳
まく黄代尽せり 伊達の家 皆御り 奥都の足軽市 也
世七日秀吉ハ駿州沼津へ到り 去にして氏政ハ 石垣下
去に秀吉より人を添く伊豆堀まく を 西へ又明日 ハ
和平の相品 〳〵 として 黄徳川の 陣 て 陣より あられ
を 相 日 秀吉より先陣乃面〳〵へ今る秀吉伊豆の三島へ
黄陣出へられハ遠として大名あと〳〵を家康へ 徒者
数人を 並 名 小性五三人 去 やうに 出立せ 為る〳〵と

あり為れども係事敢て実形なるべく為立ちり秀吉次
第て対面し三河の本陣（八月二十五日大久保忠世）
山中薙山の南城地を（去る十五日みな彼城より西に当りて
高山なり）こに上り山中城を見る明らかに仕寄を付て
先氏城を責る元（一三河国地侍家康に攻具
を乞ふ）と如れども三枚橋（歩入られ八月の別に
城る秀吉沐浴して福島左馬助を召寄明る辰刻別に
移山中城をせむ）　徳川殿小田原に信雄家老細川
藤孝中川秀政蒲生忠政を薙山城を押へ山中城（八を江中
納言秀秋大将軍として三河国を固めと下知
せらるる

氏政以下を向付東八州城々を攻る事

三月二十日より氏政の舎弟安房守氏邦（尚付い新形の城を初は
長田右馬邦房の長子なる故ちが新太郎と云ふ
上杉家ほろびて後八長尾為景元立一新形より振出す）を指て関東の捷軍
とせり氏邦八小田原（公領る故新形まい井上三河守思沢上野
守村を江戸二上野に沼田の城代物保能定守に軍を
を添く強くそめく物保の弟小平太ちくま藻漱のうし
城る虎の家に公義也り又ちくま山中の日尾の城ハ北条新
を江戸守新根右馬の城を源三郎正義黄伊勢こ子
右馬助ある山城ハ甲州より山伝ひの海道なれハ徳川勢
うしや先より武蔵（歩入ん）との用心氏邦我為八子余
強く小田原（入る）より又小田原ハ相田う大会

油断せず備をさだめて内外のふせいを怠なく行ひ
おわり武蔵上野下野安房上総下総八州の兵四万余騎
義朝人数三万人夢結しけれども中書王を始奉て今
を定めの日を待りける処に先城郭口より書を八条殿山家
岩槻三ヶ所城を相田尾張守武州松山の城を上田安房守
ゞ子上田上野介政房四郎下総城を京武部流成（千葉新四郎胤頼幼名成胤武部陳代）
上総五郎兵衛城を太波太京太夫敦忠下総小金城を荒川豊前守
太清国東金の城を福田伊賀守相模城を芳賀
伯耆守綱可安房国松本左衛弘正小船合一万三千騎なり
湯本口を子葉の後軍 鶴賀城を椎津隼人佐行憲関宿
城を子葉の旗下築田中書政豊三千騎八千人に行胤口を

（武州浦口）武州八王子城を小栗陸奥守氏輝忍の城を成田
下総守長氏舎弟左馬佐長忠一族成田太郎佐長忠下総国和田
長瀬相州荏原城を荏原豊前守忠成国又十郎忠瀬下野の
三毛城を三毛上総介政房下総国皆川城を皆川山城守広瀬
三千騎一万余騎なり太三ヶ所まて上方勢を防んとそ云
安房の里見左馬頭義頼八幡太郎義家の小除と云枝なり度秀言の
陣へ加るを聞て共田口八岩付城を太田十郎氏房（小栗新兵衛尉）
そして集勢二千余人久地口を小栗左馬
氏忠大将そして七百余騎にて笹目を為防戦佐野城
まは家人二百人を引しりり早川口を豆州戸倉城を小栗
右馬佐氏光そして二千三百騎まて守除（この氏光厩橋の城を なれども松田の婿なり）

笠原新六郎秀能豆州戸倉城を始め諸所の城を攻し給ふ天正九年誅殺せらるる
首を刎て添へさせ又の尾張守殺なりなりあるく命ハ助けて而能ハ没収せられ戸倉
城も氏光の如くとなりて新三郎のもの
城も氏光のごとくの城なり

左京亮憲明 本郡城主本郡宮内少輔白井殿小見小四郎忠則
兎元城主高橋紀伊守綱清ハ八百余騎にて氏光と共に
黒川口を守る又八列乃佐城へも氏光より兵ハ
小田原清蔵の為とかや先ッ伊豆下田城ハ清水上野介正令
六百余騎にて守りしに秀吉丸鬼大隅守加藤伊勢
志摩尾張三河を江藤河北条新助殿より豆州の津々
浦々より陸へ上り攻戦ふ又上州西牧の城ハ多田周防守氏宗
四百余騎守りしが 徳川家康軍松平源理殿率四二千人にて
せめ給ふ周防守ハ討死し落城せり

遂に尾張守にて 城を渡せ

此時北条氏ハ武田の旅下芦田下綱守殿ハ嫡子也
武田方へ 徳川家へ走り信州岩尾の戦に軍忠
ありて討死し子孫人を立て 松平氏を賜る一族の如く
一族ひとり南城を攻元し功賞して小田原城の後巻
の城を守り居り

又上州松枝城ハ大道寺駿河守政繁息新四郎政憲武蔵
鉢形城ハ小泉氏邦の郎人同忍城ハ成田氏の家人
会賀野ハ会賀死 憲明の郎人源谷城ハ源谷左京亮教郎人
和列厩沢城ハ大谷常刀和信立生城ハ設度郎人皆川城ハ
皆川広憲の郎人武列松山城ハ上田設度の郎人上列金山城ハ

中良伝流当城繁盛今者 長尾新五郎景繁ハ郡人武刑岩付
之氏房ノ郡人下総国ヲ案城ハ多賀谷貞胤上野国館林城ハ
小栗氏規ノ郡人同板倉の城ハ間下 城主ハ範門仮北條
測名上野原規宗大鳥城ハ行足国情ヲ略方薮国城ハ蒲田
又十郎吉清下野住人朝羽宗綱ハ秀綱ハたてハるそのの外
小田原ヨリ下ハ常ハ郡人城ヨリそめ玉て城ヲとりあり
又板木城ヲ玉義出相原寒方ハ小栗氏輝上信れ八王子城ヨ
さるを下総ヨ板木城ハ郡人ハ蒲ヲ而ヨ下北条結城ノ城ヲ
結城中務晴朝ヲ秀吉北味ヲ〻そして板木城ヲ攻落ヲ武刑
六〻城ハ行方浮正出用連稲毛城ハ田路ヲ郎ヲ房ヲ和樣ヲ
武蔵弘成弱林図書定朝ハ当ノ方ノ藤下ヲ玉い小栗北

下総ヲ当ル豆州和泉浮城ヲ書ヲそて大義長ノ当ヲ設こ
ヲ下下條城ヨハ書ヲそて清水ヲ左馬正治ヨ孫ヨの城ヲ
小栗七郎氏業加て守ル様又郡業所の内義田の城ハ小栗氏
郎ノ息新右郎氏定相別義沢ノ城ヨハ小栗新三郎綱規
助宿城ハ小栗芳太郎氏ヒ下総国木溜ノ城ヨハ伊勢海平ヲ
具奥小久保城ハ大和ヲ新時新国国本木城ヲ小笠原橋ノ当
長尾相田尾張ノ子息ヲ原新六秀範式部浪人金子左ノ助
秀治ヲ孫三郎秀也ヲ叔父肥後守秀村上田左ヲ未政朝ヲ
小田原北城ヨハ上野江戸浦城ヲ山角上野介定ノ郡人
田原左馬定未田左ヲ定ヲ左ヲ多目左ヲ未ヲ長定ヲ小田原へ
入ル又稲葉伊勢ノ当勝房入道乃瞬 不老動自由康伝田下北ヲ

信明南条山城ヲ相続同右京相家同右馬ノ丞相馬ヲ長瀬
小西集人正正行留永内信正忠也大義甲斐右京亮相明ヲ山右京
友継芳賀伊豫ヲ秋保紀伊守右京亮忠山中ヲ水信形伊東
右馬允祐衛大義武部ヲ信中山助六信継原豊前ヲ流清
留国六ヲ留郡政村ヲ小田原ヘ出ル菖蒲城ヲ福島陸奥ヲ
相馬ヲ守山城ヲ酒井武部忠則下野ヲ足利城ヲ白石豊前ヲ
上総国一ノ宮乃城ハ栗林弘ヲ同忠廳南右京秋度廳
小源太上州安中城ヲ安中左ヲ度盛布川城ヲ布川弥右京
下総佐倉ノ城ヲ佐倉筑後守相友大須賀城ヲ大須賀相愛上州
大胡城ハ山上右ヲ多ノ郷人同忠伊勢崎城ヲ行沢源三郎同名
和城ヲ津久井駿河ヲ秋葉殿相ノ城ヲ山上兵衛ヲ同義兼城ハ
小幡山城ヲ虎豊後守城加勢ハ栗田采女正幸沢山城ヲ
大貫城中忠宗ヲ京兵衛城ハ大石誠後ヲ重吉武州石濱
城ハ子葉源ヲ流村下相廉沼城ヲ宇都宮弥三郎負綱同小山
城ヲ小山小四郎朝宗信長坂中城ヲ海野四郎右郎幸村武州川越
城ハ小柔氏竜ヲ相（なまい）ノ郷人（ホ）ヲ太田ヲ同家西城ハ小田
助三郎長宗ヲ未葉守ヲ同沼尻城ハ幸山右郎資益ヲ列
津久井城ハ津久井右郎源三郎流同新井城ヲ芦名弥三郎
義利同三春城ヲ小林弥四郎方ヲ子息ヲ云下総小倉城ハ荒川
豊前ヲ国清同栗木の城ヲ小笠原播磨ヲ長範ガ郷人安西
出羽ノ同椎津城ハ山角伊豫守ヲ郷人上総の国伊小の城ハ安房
豊前ヲ正季ヲ郷人同根古屋城ハ栗林左衛ヲ郷人同右氣

城を杉田左馬丞重同城戸城を大谷左馬の家人同小濱城を
岩田弥吉江房兄水城ハ山角紀伊守定勝の家人同勝浦城ハ
松本左近衛尉和田城ハ内藤大和守と家人後別所孫七郎氏孝と内藤大和守とよ三百人ばかり在番し有所
植川殿の大勢向ふと雖て国退て小田原へ帰る小久保城ハ大和
名戸ヶ浦時親の家人等ハ籠城の家人等ハ籠城の
雑人の家人栗橋城ハ大石源左衛門の家人常陸土浦城ハ毎日
毎人常出沢相馬治部少輔武蔵系三河守系北国弥吉系貞本
右衛門尉四郎左衛門ハ山中主殿助上田左陸介等之ハ
南条武部安房守の麾南大炊内蔵左衛門南条山城同左衛門系
同民部同左馬助伊田大膳清蔵羽田小沢郎正次已下の衆八別

の衆ハ城を居城に家人を残し小田原へ籠城ハ三河の
籠城ハ有り内ハ城を出れ毎日をたのみて秀吉の大軍を
迎れけるとぞ

上州松枝城攻大道寺駿河守政繁城と没落事

小田大将加州金沢城主前田利家ハ子利長ハ二月十六日加賀
を立て木曽路へ出る東国へ入る右衛門尉ハ上杉景勝越後
毛利河内守秀頼信州真田源五郎昌幸ハ三万の子余騎利家大将
として三月八日上州松枝城を打囲む城主大道寺駿河守政繁
息新四郎政照ハ兵の謀と和議し家を大勢なり有れハ
寄手ハ不叶して引退く節り居る利家下知して城を
攻落しなんと小城ハ日を送ハ口惜き次第

たゝせやいさや急よせめんとて法勢一向より攻かゝり甚
きびしうしかは城兵力尽て城主以下降参し先手たんと
ふ利義ゆゑして人質をとり相之十日より城を法乗人数を
入置されり中山道を経て武蔵国へ出るに海道の敵を安
中余綱野本清源寺田口城も敵を小田切城を降参し先
陣を進めり

徳川殿軍勢うん付氏仕置干佐竹京事

小田原北城は新九郎氏長入道早雲の時大森城なりしをせめ
られて奪創せしより小田氏綱氏康氏政氏直五代を城主されい
ま粮水木石法炮矢玉菜蔬長刀已下事かく事あり日本の
勢よりて五年攻るとも敵へしとハ見へさりけり　徳川殿
秀吉へ降しなびけハ東国ハ小田原をせめんとせい
法城より法諸して軍旅義なるへし　ものれも今こゝを法城
へ分て一揆くれり　中城枝城も一度よせめい法諸ハ相模
おとゝ降参せん　秀吉はこゝい孫大勢に成て日に敵ハ兵粮
尽て城を落へしとの給ふ秀吉大ゆ感心して居うて多分
給ふ大名石田三成本村常陸介重義浅野弾正政長
乃軍数十人并に　徳川殿へ中書右衛門井伊直政元忠平
岩七之助親吉本多内ひゝる又小国方前田又子山形義光出羽上杉
京勝毛利秀頼土田源次本多又一郎に加へ小田原の搦城へ
よせくせめうあり

此時蒲生氏ハ京都より秀吉へ申とゝ上杉ハ京より馬ハ

熊様ようなる又作こ成政ら馬京ハ三階堂立ハ成政ハ城院ハ記し
たる氏ハ日記ハ作こら馬京をうゝやむ事久し彩くハ
ゆゑ〳〵ハ三階堂ハ馬京ハ仕んとハふ義吉学まひ事
を望むゝ勢ハ家三郎ら勇をうゝやて我津ハ義秀を
翻しうゝ光家ら勢をさそあゝん柏成政ら武勇ハ古今の
名誉日本無双のものゝ和れ人をみていハ中くけひゝし
ハ急ハ柏ていらゝ加ゝ今るゝりゆゝ中ゝとゝ
らハ氏ハ悦てうゝ是て富所ゝ往所をもひて家ハ彩を
書せて彼地柏城ゝ是老臣町野左を繁仍ら妻をなて
彼ハ彩をもゝしゝ（ハ妻女ハ氏ハのめのとにく是ハ今夜討
あゝしなゝ半ひゝし）
犯と極しなゝ思ら父の点を見知ゝ者れハ汝是を石柏

して加長の後ハ見ゝ〳〵との事ゝかくもうひて小田原ゝ
氏ハ潔を見えゝ者り氏ハ小田原ゝの行程先陣後陣
を往返ゝ〳〵ハ列を下知ゝうゝ彩ゝ秀吉ら信長ハ
鶴尾乃宮を甲立ハ立て中宮男にまゝせゝに宮柏ゝ
居彩を中付剣ゝに居不遠ゝり氏ハいうて又教会を
ゝめゝて教ら示彩ゝも彼男私の弟にうて居不を遠ふ
ゝゝ三度に及ふ氏ハいうゝ事いうにゝくなれハとくゝ用
を怪んゝゝ罪重ゝ不教ゝて教を逆ゝ細を教海ハ
彼ハゝゝ彼ら罪ゝ一人を罪ゝて百人を助ゝハ遠ゝ
ゝて彼宮坊沐ゝ〳〵ゝ此ゝ今度日本の大小名相見ゝ
向ひゝハ御門の人数と氏々の言ゝゝハ行列向ゝり

りりしく秀吉公見付給ひ上洛に召しつれ給ふ所秀吉公も大
に感じ給ひけりとや

両白川依事　付　河野左馬助高名之事

京勢は笠根を詐て相模の者と出て打よせくへ陣をも
徳川家大須賀五郎左衛門の先陣は僅十五騎しか比衛に詰きけり
坂部三十郎・庵原孫三郎・久世三四郎・渡辺半十郎此時小倉勘六・河野孫之
小栗又一郎らを三百人一所に相合して山中の京勢に来りより
是坂部久世等に先して笠原弥左衛門・渡辺図書・酒井与七郎・藤原庄兵衛・作兵衛
一助・両白川備へし故今三百人へ三千手に依して両白川の首級にかく
まてつりけるに大須賀人数の者共なんの庵原らむこ河野左馬助両若
とふとのハ河野伝蔵等三好（孫兵衛後若衆）ら次男にて陣中ちうに

背しに此付ハ大須賀五郎左衛門此陣中に有しか先手の部下の
人数大軍の御先手卒尓の事なきハ大軍たりとも左右の
まハかくしたり（大須賀五郎左衛門事初名ハ岩松丸と号す　河野氏ハ後に右衛門尉秋長と云）徒者を両若衆として
大手将を取籠て一陣より先をせんと争ひて笠原弥左衛門ら如此
まけじと渡辺角左衛門只四人ひそかに出合此ハ三月八日の
是孔刺御旗本両百余人寺のひやうに御旗本依之のみを守
る時河野左馬助両若衆と云ふ声に名乗かけ三百人の陣を
さへきり突入より三人もただ出て戦ひもならぬ御旗本の
中へ切て入る御旗本右往左往へかけちらしける中に竪四人
ゆみと申す四人と共に討取けり是ぞ敵の一番首ハ大須賀
たりし事なりとも加へ坂部久世らの者共を取りに久世

昭和四年源氏物語と題して源氏と
に源氏物語のやうなりしか柳原屋敷の家人（浪速義士）源氏
をもふ者人なるべく底を尋ねり意一人脇屋敷
左右よりけりて四人にて捕りり家屋敷
を放火の事を面て知りぬひて命を助け柳原に行くも
なり今度の左馬助は伏八郎より面れりとて実検しぬひて
張りて上度小田原表の御書とて実検しぬひて柳
に面られ今日は左馬助は御門番の中家（よ高れ
けり

大阪賢人康成の大臣相武帝代村岡治郎右衛門
上総介四郎左衛門の孫千葉介左衛門の孫千葉介

左衛門四郎大須賀四郎衛
教経よりおくらひて源氏元暦の軍より頼朝あり常衛門
嫡子衛四郎相模三郎武名三郎衛門四郎
大須賀四郎衛門佐六郎衛門通六郎赤十郎衛門
等なつく者ありて忠孝せて忠孝孫四郎教経実検教経
教嗣惟康家久の守邦北軍九代右左氏千右衛門
元弘元年より邦義に少弟なる時千葉九郎
討死しまく知る事は氏千葉氏に右衛門千葉
大阪賢九郎重葉右衛門源会に徘徊し右左氏千葉貢時
北軍北時大阪賢四郎之衛門を左右より
千葉氏に代代北時氏代とうし氏大永六年四月下旬

浪人として三河国に蟄居し一子をもうけ娘にして　家康公（徳川家康）門葉の子を養
子とし大坂冬の陣夏の陣に名を出して数の軍功異人
なりし故なれば家康公ハ厚く恩賞ありしと
なれども嫡子を生まざりしかば大坂冬陣と名を出せり
山中源左衛門　山中藩主三代
寛永八年三月廿九日の朝山中の源左衛門とて年ごろ
山へ入り猟を業とする者ら山源を松田左兵衛尉殿
同名豊和朝倉能登守三人が謀りて密民部権守殿
佐藤左馬の栗毛駒和山下を庄司源三郎田中兵庫山崎九郎
行山左馬助ありて山中に乱入し源左衛門を討死

とせり人倍一方ならぬ婚孫長次郎を十四歳にして家を氏
源左衛門を討死せし汝は尚家へ行て安堵と身代浮沈を極めよ
いかに長次郎申して親父の家敵と申ならば生き帰るべきに
見に立帰らず親父を討たれ家へ行いて尚家へ参ん申やとて
涙川せき流る源を流し大あるを見と見ひらき遠いに
あるを吉左衛門汝存命せよと言ふまい恐れあしく名を討死
せんと云へ共生命ありて源左衛門を討死せよ
かしと云ひて立ぬく涙をとゝ源左衛門とゝふ
嫡子十六歳より源一を長次郎より付て尚家へ遣しより源を
松田左兵衛尉殿も尾張国へ成源中へ帰し極めて
討死仕るべしと書の年一向年月を経ずして中年より玄

乃至松田か太刀ハ後世までも言ひ伝へしより当手の高名者と在
秀次ハ陣堀尾帯刀堀秀政山内対馬守一柳監物出来
一柳伊豆守木下長谷川藤五郎中村式部を向ひたる　徳川左
乃勢ハ右久保を押えて本山中より寄せ山中ハ先陣
中村式部一氏堀尾吉晴一柳出来同木下なと定らる南方
より長谷川堀ひとしくせめ城よりきびしく鉄炮を打出し
寄手大勢なるを誇しと秀吉を前に見て中村式部来る人
数を引て山中の付城までハ十丁もあるへからん今かし
陣を出て付城の根小屋まて寄と下知せられ二人ハ陣へ
御本陣中村か家人へ御書を以て申来り一氏へ申遣ハ
只今秀吉公の仰ハいかにもして一氏をかくしと加ふる御書

取り彼付城は此所より山岸多く道をくはして見へかけらし
乗彼よりてこそ陵易と巡らんし為付城あきまよすはやはく
見へたりて味方味方を招くへしとやらん人数を引へしと一氏ヨ
約束して助之丞は鳥毛の大半月はたしるしにて馬にて打
乗りて助之丞の為當てと只二騎をもつて付城より一町斗
過ぎて根新をとりかふ城の張番足軽と見へて五六十人
在けるか助之丞を見んで鉄炮おとし打かけて城へ引入り堅
よく手よりて付城を見るにとりてのたて三千ほどいるとし
敵大勢なとても寄りうちに篭りて防ぐさい乞ふ十まと
見し従い帰るに易くぶんて城中をさけあまて兵久の家来
出張の千へうこへし助之丞も旅をあわて味方をまねく武部

一氏を毛をうんて軍をしかけ辛し七八十北道を自たくせより
しく動をかりハ此城のていたらく仕寄ハ及ず一ぇん
攻よせめんと右毛しられもゆきけりに国を動をかる
関西ハ敵方の下知をはなれて城へ入星へより塀へ多代
かゝ事をあらしめ中村今を制し為て切をくとの知を秀吉
此村もうるをかれ下国をうち大軍月ヶ日を付らるをの
御方を又ゑいられ西し中村ゝ方の中ゝもの大軍月ゝ
ゆるをいつよりやくゝし滅ぶ此村動をかゝ塀へ入ゝ村
かのを此村又へさりしゝ秀吉ハらゝれゝ為ゝ又ゝ
に又国をあらゝれかて塀へ寄ゝあゝ秀吉又ゝをひて城
を兵今為へしゝやくゝ大畑を城きを立て西軍をよゝ

よゝて本陣より堀を城くゝ寄ゝ西勢一変ゝ時をあけて攻
うゝ城を北中に乃居ハ為て討死の志ゝれハ外も事を
屋ゝて迫ををゝり城
老衰ゝ方ゝ方歩員を警馬せり此村秀吉の家を一柳伊豆守
ゝめてゝり せめゝり 沼地ゝあゝりて 討死を毛一番をゝりし
中村或紀ゝ小性中村を治十ゝ中ゝれも 天性を名のゝれて
十人ゝ家ゝ加り義国をゝも 国役を動ゝる国面は尚ゝ
先陣ゝて国をゝり先へすむ文治も同ゝく先をせゝ文治ハ
敵ゝをは働ゝくゝふんゝ為ひて 押ゝ 縄ゝ 城を為て一番に
城を焼城をゝゝゝけて文治ゝ 腰ゝ 番ひを丁ゝ切ゝに腰ゝり
上城へ入を腰ゝり下ゝ城へ為ゝりゝ文治ハ下ゝ紀

老若彼か勇をほこれみて或部分捕ハ鐵炮を彼か父にあてたり
此時中村か家人九人舟城へ透き入し幅三十間長さ三町余の堀ハ
敵者に追るゝひてせめけり而宮城等ハ百餘人共て籠くに鐵炮打
堀とし桃を並へて討死す三の丸に只打入敵を追入る
此時そこハ中村か其の外他の勢ハ未ひさきりけり又右の谷城
乃出は吉本新左衛門大ふくらか武者二騎城を
追付真木か敵の首取て本陣へ帰る秀吉大に悦ん手柄を
在へ[illegible]瀬名と新左衛門ハ箕尾戸口へ付たる手勝より一氏か家人
陣さきしか須絶まて多く討さしに新左衛門も手負たり
爰に城中北条氏勝兵に松田右京大夫朝倉以下命を惜まて
蹈か故か者とも多く討死したり
此時福島正則か使者[illegible]中村勢と一所に門[illegible]

渡邊勘兵衛にてハ是を見せて其身敵をうちたり
こゝに氏政か侍に上州大胡城主山上
に在る兵に猪俣部氏親かつといふもの氏政氏直に下知として
山中の城へ兵衆多く籠らんに乗りしか二十余騎まて馳せ行
しに徳川勢は早く沼津に在城して此日の案内老若山中
椎史此道より一騎打に箱根の後へ通るに其外日今日の方ハ長
谷川堀本村か勢城のおとくたる者とて今秋小田原へ急る
と見へ上より沢を切られて後備益なしとて小田原へ[illegible]
此ていを秀吉ハ総か陣より見下して城へひくに落行と
見へ在り落城をなしとて諸勢一度にせめ中村は三の
丸をせめられとも二の丸比勢文丈夫にして彼か前さくらん
しかハ門鉄をやぶり二の丸へ込入しに城兵もよく防ぎ

乾の方より八本村常陸から息左衛門義より播磨山田一郡の云
城を取る城をあらく〳〵二のゐもと奥へ引入て防く二のゐもと
二のゐもとに大堀ありて大なる橋あり城中の云は橋より
入て門を立んとはぶを中村勝はたらいて入て門を立へきさ
ひまなく紙よをしゝ破らる中村はたらいて中ゐもと〳〵せめ入ふ城云
二百余人虎口のおよ池ゐもを作りて待けゝに中村ひふ
まてはたらゐてかたもやく久しく強ふ城を相田左衛門尉
雅楽集人行方強ゐ佐長左衛門尉中伯耆守吉原
同原三山岡左衛門尉長山中大炊助小山大膳亮二百
騎人命を捨し風のおとく雲のとく強い一人も不残枕を並へ
討死しをりをだ少弟氏指は討死とゝひ生ゐ中ゐもの奥に長
さうしを書る奥よ敵ゐることはたゝ生涯のつゝき且飢ゝ
にやゐ城に入るの敵く義を捨りて食おをとりてひ伏宮を
奪ひお長石見ふして日波よ書りて世者乃者をれいくら
さハくふし長〳〵引れも敵の知つきるゝねハ氏指を
四岡よ城を出て山宮〳〵と走年紀和泉よ蓮山城をに籌大
乃尺〳〵を安者者とて先ゐ三門と長をおとして
山宮と四乃て方角を乱らしたひ伊豆の方へ長乃けり
ゆくゝよりてひを逆〳〵ハ氏指ハ城よて死る事を
悔ミ自害せんとて胡会能生を書る播磨国目の者に
氏指の弟彦八郎三郎ゐ〳〵に諫めに一族郎ゐ十八人
山宮よてとゝを出ゐ久野の方へ出り氏指の長城酒会

の内甘縄の城へ打入申候　明会い氏は入道してたゝ也と申候　中村一氏も旗馬
印をかゝ丸と立双へ指付をあけて山中城へ中村氏(一氏)指一番に
乗掛たりと大音よばわりせ申候　秀長も手柄を賞せらる
と後部の系に云へり　(部)　(中略)　今日の城せめは一旦の軍なれとも
西とうゝひて敵打せ味方心を有軍なり　(中略)　今夜は旌旗もそろへ
度平あんとなり　(中略)　今夜は旌旗もそろへ　(中略)　たまひて
用ゐあるへしといはあるは一氏もとゝ　一平と体一りれは
秀長の旗本を用ゐよくそろへりあり

薙山城軍之事

にて山の城は銀林斎城を小西氏紀大将として滝能動海也
紀貞布川大学次郎忠須小西長右衛門氏盛唐帆源系寺を
小西寺貞月貞綱小西系十郎左衛門桂井鍋右衛門友盛大谷
吉助宗兵衛石毛彦右衛門康高系三角与左衛門東條小机
助理又重工義次郎三郎祐光笹田彦四郎小寒寒の侍七百
三十余人於在二万九百十二人なれとも皆命を試城にかけ名を
古代より海さんとなる　(中略)　なるは　(中略)　田信雄次将は時代
家政福島左衛門尉中川右兵衛尉　(中略)　氏之中川義
長系秀政長谷川右兵衛尉　(中略)　氏之中川義
肥後守忠弘筒井伊賀守定次兵に居留守伊賀薙薙山城十
重廿重に打囲み日和攻城の城の大将氏親は名将なり城
方の中には二人張三人張の手たれあまたありて討出る
あまた矢は一つもれく又鉄砲もけく打れは敵の多く討死
しかりにたに敵の手中より取たる首を多く豊臣(アヅ)たけに
をんて高名をあらさんとて氏親自ら打出て

かい松石を用ひて家ゝを作れてはるゝ死者人数を福岡西則
ちくゝるて入者りしゝ人数百余人一度よせあつまり焼家
をなてやき殺さんとせしゝ搬よりの矢玉にて死をもつゝ
さるの数を見て者ゝ引退く氏紀と西則とい乗に勢ひし
に搬をも焼ものなを近寄していやゝ大石氏紀をもく
りんとて一人南のもゝ二百騎人福岡ゝ横合に入しゝい
福岡ちくゝるて引退く氏紀ハ七度せめ寄く人数を
引上て搬中へ入あり者ゝの内死者三百六十人とゝや者
も初の忍び入とゝちゝい今いを是ゝそしたり者り

野州佐野搬没落之事

下野国佐野搬小岩屋ゝ氏忠ゝ搬ゝり氏忠ゝ当家乃
住侍ゝ数百人を引率して和州へ出て小田原搬小峰ゝ
参ゝる氏佐野の搬ゝは信長ゝ本流佐野阿波守宗家
編成者をしゝ天正十二年十二月毎日四度ゝ搬責として幸
忍れ討死一ゝに男子なく息女をし有佐野の居たりて
氏氏忠を生て三人とせり内ゝ百今度も氏忠自ゝの家来
を召連て小田原へ引氏搬ゝは佐野信代の家臣大野
弾正忠実行氏原三清秀清布久隆の内吸教山上兵庫内
時秀佐野を新ゝ補編豊ゝ家紀伊ゝ当家右則
を見刑部ゝ補秀弥ゝに岡軍者原て二百人近ゝ者ゝり大の
八人の軍もゝとくゝ搬者ゝもゝ搬ゝ者ゝ軍ゝを
入意を有くい佐野の搬に居ゝり者ゝに前の城を佐野

宗徳の父小左衛門宗徳の弟に同国天徳寺北住僧なる僧あり
ありけるが宗徳討死し時も此天徳寺は住行家宮方に味方
して佐野家を攻んとい〳〵も家住大阪川世代剃（天徳寺
をきらはせ）き清河りしなるやく岡付て京紀（より新発意に
成佐住せり佐住と云は中の僧を治して天徳寺と号し世なを大変物中かの
佐住も佐肥の血脈なれい害あり〳〵とて出家とんをあるを世
佐住を出家とする　知らに秀吉今度東国下向より付て上野
国の出家門にもせんとて新発意に成る北佐肥の天徳寺の
先住佐住と伯といひ有る僧の末にて秀吉北住は出家い
佐肥の血脈なり汝志を立て佐肥の家を継はあまさの弟
佐も時を待て出家の切腹は勝りなんとせめらき
六天徳寺に長て古へ行て度百姓をかくひ子度

一族郎従の方〳〵郎従に八人の中にて大変城中汗い出家
よ志ふらくさらはなきかハ皆る伯上一味して佐肥の家
を立んとて大変七十騎人を集て佐の〳〵撫に籠る伯
と郎従人より出て月廿八日佐肥の撫を責給し大変城中
を引あて撫を討死し撫家しうい伯撫へ入て秀吉へ
らくとゆ有れい秀吉怒んて伯を遣佐させ佐肥所望文
改編と名乗せ〳〵い氏天徳寺の住伯る伯る事也撫と秀吉
力を合わせ佐肥の撫とする志の明乃
大名とそ〳〵あ〳〵

再蓮山攻之事

蓮山の家を出を集して在る〳〵山中家撫して出

更に命ずるとしらハいとや城をせめ落さんとて三月晦
日御田信雄城内に火を放細川中川勢と（此時ハうくにあり後小田原へ移る）戦ひ
生駒右馬頭殿ハ野間甚平を以て信雄を説き城内二ツ丸百十二人を召出まりて城を民部ハ
御をちうくと言させてきひくくち城地を射出れハ
多数死人其外手負ハ内ともに多くハ大勢なのりこたね
出人せあるを中にも蒲生忠三郎老長蒲生左文郷可先に
きるみ鉄砲ふあうらを以服部をうとせーう南りたん
書を以指上て出る血の流るる源のおとしまも
いとまなく其夜しまり福島四郎ハ大ほうを責る城内
より遣ハ三百人門を開て切て出る福島方百騎人れくるふ
所より城を民部見て三ツ家人を率して出る二ツに
さかと多れ敵ふ四郎ハ先也ハ敵ふあやうきを福島
三ツ家七百余騎にて出て十方に南りに福島ハ退
出る人民部三ツ家ハ敵ハ三百人福島ハ二ツ
ら色色きを以御田信雄出るりにせよと知せれハ
つきたてて多ゆを入て民部左敵を出せ家老
をさしはかりて人数を引入りて進退の度に南
ふ年はさらも神のおとしと多ゆも大ほう敵ハ
ちをは多入りとあるを城を攻を引とはふにひま
なく城をかし入りくくつ入しに付民部引出て大七月にて
たきをたりたに毛利氏人まて攻のとり城へつき

為一之勢動揺をしてあらうとし 以付搦手搦手の
大石石弓を以小笠原大隅守立花源次郎高橋
理兵衛六人池を乗て搦手よりひらく 進て城敵を突き
ふせ又ひとしき間ひまに搦手ハ門内よりハ大石氏紀伊
七人搦手ハ門内の龍を突んとせしを福島の手に可見
文義をたすけ高橋の首二ツを切のけ高橋の
搦手の敵の門内ハ是ハ池の搦龍よりさき海を乗て門の
龍を突きり文義は池をのりて大石氏をあけて鬼声
出龍を押ても搦手より大勢にて押えしハ間もなく以付
文義を殺んとて福島ハ高橋せあるを搦手入て門の
敵矢さ面より矢頃砲石あくまあるを福島ハ高橋
搦手をあく 討死を門敵 近所事を付して福島寺
林兵衛ハ四人 門敵 をうけて文義に加勢をたに門を
押ても開 とハ見えさりけり 丹波ハ味方を招き如色
くしよ以付福島勢二十人 奈ハ倒 以付大隅守
蕃元英と福島丹波ハ高ハ笠原堂小林事義蘭田新六以下之人
来加ふ搦手より八池長右ひとしく 丹波小林蘭田
をとられ文義ハ吉義も多原ハ高ハ笠原中ハ留文義
ハ搦をとり池ハ蛭首を押ておよ龍をたてにより
四郎貝をかせて 吉を引上 ハ彼已人ハ此名を名ね
源砲をもらさにけり已人ハ去 搦ハ出て福島ハ高
大文ハ切ハ家人 福島丹波ハ高ハ大隅守蕃元可四文義林兵衛

こゝかとゝふのはしと名をあてゝ氏紀下知して
頭絶をゝこせて巳人ゝ勇をゝんせ
なゝふ流拙を尺せんとて巳人ゝらし流三郎殿を角てゝ
をくひゝ〳〵武名ゝ〳〵を三十自は頭絶して頭(エボシ)流して
ゝりるをとゝ胸板を射ぬきあゝりのむ歩を出ゝ二人に勇り
三人ゝともにみちんゝ流て死なゝりゝ福島巳人ゝを感し
中ゝも大郎ゝゝゝらきをゝゝほめて去るゝゝ以後ゝ
ゝゝ流味ゝゝの味ゝゝあゝ出ゝ登ゝ人ゝゝ汝等は我ゝの軍
相ゝふのはゝれハ面ゝて命を合ふゝて永くゝる名をゝ
とゝて平流玄義亀ゝ助ゝは太刀刀をあゝゝ大荒い流を行
生れゝて西門日比秘郎せゝ行年の長刀に等流の刀を

流て張りゝゝ流味ゝに秀ゝゝより福島庄蔵せを左て今日
あゝの働豊ゝのゝの中にて具ゝ少ゝ大将伝羅の軍事
抽きゝゝとく抜ゝきにゝ山の郷を取ゝゝ
郷ゝ氏紀ゝゝゝらき出ゝゝは三人ゝ出ゝ
せハ味方ゝくゝゝ流ん出汝ゝは左を毫ゝて華山の郷より
小田原ゝの返落さすゝれゝゝ四郎法勝ゝふれて必郷を攻ゝ
ゝ氏小田原ゝ義ゝハ華山をひゝり義郷せん人ゝ敵をはゝ
蓋ゝ和今日の討死を尋ゝれゝて福島ゝ家人雑ゝ六百
八十騎人ゝを加ゝ原をくゝゝとゝ中ゝ蔵せゝ討死巳百三十
騎人ゝを加ゝ原ゝゝゝ中ゝ秀ゝ乃ゝ日小田原を攻ゝゝれゝ
氏ゝを伐ゝ〳〵福島巳利騎人家政中川秀政忠政も田

氏繁生駒左兵衛細川右馬頭右京亮弘篠井宮内少輔等ハ
為りて対陣せしに必合戦すべきとて秀吉ハ富士へ
向ひ給ふ後法花ヶ嶽山を固めて二月下旬より七月
中旬まで せめ給へり

秀吉向小田原付箱根を責給ふ事

秀吉ハ四月朔日の未明より箱根を越あ足ヶ箱根山を踏え
陽の出る頃に陣を取れ松山より石垣築て居ぬ古城
ふるして三郡に竹束にて塀ハ二十六町ばかり
あれハ平押よりあとに成ぬ諸人ハ驚き怪みて室町にも竹束にも
相ふ見て富士へ中ハ入る武田氏政氏也大ぶ沙き也
へ出あり各交に寄る一ぶ武ハ也 秀吉ハ

家康ハ孔雀の跡より伯耆へ出さよし北条氏
ヒ人と宣ふ 家康ハ村部長門を使として伯耆へ
先陣のかゝりけ也 家康ハ重て 家康先陣の令
なれも年ふるき人の所ふ ハ家康ハ所もひくいて
先陣を懸へ 小田原中に家屋を事い論ふ
中ふ人ハ名れい名別 家ハ家ハ小将西丈ハ 家康ハ
陣所の上にたゝ人といふて切を立ヶ さんむ 軍勢
奥別ハ付 富山重忠先陣の事さりに小田氏一族等に
工長ハ六七人先宅に進むを富山ハ家人 富士新左衛門実氏
始て押んとす重忠制して 此ハ 重忠ハ力をゝ家人ハ切
主へ ゝ人をのまゝ 所を付て 家康ハ富山ハ

陣をいとんや又先陣を敵に先陣をゆるすこと
勝も今尚京師を一統安敵方に無者こ味こい家
業間上て敵の係り面り活ひん事はり如こ無て智に
及て敵ちうき山下に陣こ古法より紹八今敵八武こた
地して此日先陣を為こ度へ是事無なのこに付こ味方
乃一招利を失ひて勇者此乃ようこ立をんて所ねをし
こ度こと信方武士使村敵ようふうの天花卒余ようて重士
ちれいいこうはようよ敵を不安きのうに上を中方勇
次智て見は家康此上京をいうり立ち九の石可を
和又を勇者此後智を恐れて位の紙ひをこうと
西てるし勇次八こ度茶紙山中板上陣を主へ徳をかく

一大舞を焼て敵を吹ちかこ上ハ家康の軍を
おのりこ先陣と掛けり

家康ひ此智先此使ようこ度仰をとをも凡なこを卒余
なこ八いこ何の日上あこていようこ中又卒ふるり
とて面ちくい勇次を恐てを紙を掛ひ中さんて
使の氣象を知りのふ京こ将こ以へ又此ようこ方
の陣を一ツよい勇者の指ををひこ事をのへ二ツよい
ふき人此先を面をもるをあ方こい強ひを半を
いとハぬるをのへ男こハ富山こ古例を川勇次を正夫に
進一必得一おつよい陣九の敵家奇をのへてをつこ
海ちく先陣こ敵陣ふる古今の長将ちるへ一と人ア

かり

翌三日ハ法華当面の敵を（せめる）ハ時秀吉ハ 関川辺へ
寄ハ別をまいらせんと（秀吉の先陣ハ堀より
西ニ当ル）ハ仮ようとて 御ようの石垣をつき堀を掘埋ル
のを白紙をもんで張られハ一数の中に白紙ハ多ク
堀中ニて人ていきのふ兵隊ハ石垣と葉数百万ル
堀やぐら一数の中に白ハ付ル事大量ハ 堀れる
時ハ武士陣をハ今の世まても石垣山とて方そうしを次民の
方ハ諸軍十重廿重に取巻る一同ニ時を作り 矢鉄砲を発
せり 其六万人ハ 北喚声と 敵方挺の鉄砲の音と 雷
天雄も 驚き 坤地もくつけぬ ばかり そんてあり 堀中も数千百

人同く時を合せ ハ 敵心ひきて 石垣百万雷ニ ハ
なるを 堀を ハ 関東武士 ハ
防ぐ 堀を 囲む 関ヶの 大名ハ 九列 ハ 鉄砲 弘 大友
西流中西ハ 小早川 隆景 ハ 下 秀吉の 御 ハ 陣を
を 加 を 細川 忠興 徳田 信包 宇喜多 秀家 中村 一氏 堀尾 吉晴
を 浅 ハ 大村 ハ 将 松浦 侍従 南方ハ 毛利 中納言 秀頼 蒲氏
ロを 浅 ハ 尾張 国府 信雄 氏人ハ 伊ヶ山の 南 ハ 御 ハ 秀吉に
さくして 出 西へ まれり 信雄の
敵 ハ 浅井 左ハ 天地 関 陣 ハ 七方 敵 東 上 陣 信雄
を 浅 を 加 赤 明 を 方 戦 敵 大 親 を 浅 ハ 御川 辺 出 人
に ハ 柳 京 康 政 東 方 稀 井 侍 出 政 大 久 保 七 ぐ ら 酒 井 ら
関 ハ 関 大 蒲 大 原 雲 斎 ら 松 平 関 陣 ら 牧 地 大 馬 元 松 平 ら 変

小笠原信濃守 中務大輔 佐渡守 奥平美作守 酒井河内守 松平周
防守 戸田豊後守 脇坂淡路守 西尾隠岐守 永井右近大夫
内藤修理亮 松平丹波守 土方河内守 松平和泉守 松平主殿
松平玄蕃允 菅沼山城守 松平内膳正 三浦佐左衛門 小笠原右近
内藤豊前守 諏訪因幡守 保科肥後守 石河日向守 牧野淡路守
大久保治右衛門 植村土佐守 本多佐左衛門 松平紀伊守 内藤伊賀左衛門
石川右近大夫 多賀長左衛門 岩部次左衛門 久松三郎左衛門 菅沼山城守
本多大次郎 山本常刀 本多縫殿 西源九郎 松平三左衛門
松平和紀 坪内喜太郎 以下 本多の清須に続き陣を取右の
方ハ池田三左衛門 脇坂中務 安藤右京九里人数かたハ西南のうミ
きハに陣を海上ハ四五九州の大船数千艘浜辺へこきよせ

陣へよりひし〳〵と仕寄をつけれハ城からさしも手も出ぬへし
又小田原城中より出向人々ハ中ニも北条相模守
氏政 同新五郎 北条十郎氏房 同七郎 同新太郎 北条氏輝
同氏堯 同新三郎 同右衛門佐 北条氏邦 同氏忠 伊勢備中守 大和
守 小浦 北条摂津守 松田尾張守 毛利 笠原新六郎 松田
左馬助 同紀伊守 山角上野介 同伊豆守 同左衛門大夫 多目
権兵衛 福島伊賀守 石巻勘解由 同下野守 南条山城守
同右京亮 福島隠岐次郎 酒井式部 長尾但馬守 山上右衛門
南条九馬允 小田原隼人正 富永内膳 大藤左衛門 笠原川越守
大藤甲斐守 清水太郎左衛門 遠山左衛門大夫 笠原伊豫守 朝
倉右京亮 山中 伊東右馬允 中山助六 同宮内 大蔵

或部京豊前守荒木右京亮芳賀人伊庭若狭守安中左近大夫
小幡山城守内藤大和守佐倉筑後守倉賀野淡路守皆川
山城守淀谷左衛門大道寺駿河守千葉新介垪和上総介
等を始として館林在手須見ホ堅固之城々持たせとして
東八州の兵五万余人以て籠り鉄砲口より打出て今
後世までの恥辱を末代に残さしと死を極し防しかハ以て
落へき様とも見えさりけり此時家康公ハ秀吉公へ仰けるハ
味方大軍なりといへとも力攻にて落さんハ八州の枝城々を
せめ落し糧道を絶ハ兵粮尽て自ら落城せんと落城せん
との給ふ秀吉公尤とて陣をへ解て向城をかまへて小田原
を攻んともせさりけり城中にも此様子は退屈して見へ

守りありける所に上野国新田の郡金山の城主由良信濃守国繁
長尾新五郎ホか老母は子共ハ小田原に有れとも老母は
兄弟小田原にて眼をふさきてあることをきひて嫡孫由良新六
を招き云ける様人質を辛し桐生の城より出張し碓氷口の要害
小田利家上杉景勝ホか先手に加はり松枝城責にも軍忠を
励し今日小田原へ来向し秀吉公へ謁して旗を給ふ其外に柳井
野大膳大夫根岸三河守縣金沢守長尾信一族
よりハ先陣鴻山木曽秀吉公此衛汝か子共ハ能顔
小田原に在りて汝は女の身なりて義を立て嫡孫並家人
を具して碓氷口の先手を致し老母の事ハ今度に
限りて旅長く游ばせ此時も小田原氏政終て中良申もと

そうこたせにも汝を少弟にたちさういを金山桐を西郷を
くへ氏政の大軍よ三年まて囲まてうた西郷ともに不踏
して終よ主を退しめ[illegible]を[illegible]帝代の言名なるよ
と爰北御形文祝を[illegible]せり時に出京を世の為[illegible]老母ら
方へ忠賞に常陸国牛久よて[illegible]ふへしと書り
[illegible]

伊達正宗来出京付秀吉陣中雑談事

此時奥州の住人伊達左兵衛大夫正宗秀吉に出京なと[illegible]
て三月よ所紀を立て柳原を[illegible]て甲斐を[illegible]て四月三日
[illegible]く笠松へ志し[illegible]たりて組得せんるをたふ
此時正宗出京し秀吉[illegible]あひて中程沢海京に馬物を

使として物宣たりて少弟を討事四年の大名の知行
[illegible]り上杉佐竹も使をそせ慰信をあふ正宗ひとり
出京事王命よ背事[illegible]恐れ秀吉[illegible]
令度他道の本領をいたとくくして[illegible]上杉弟氏三千騎
[illegible]ものとく賜ふへ[illegible]弟氏事うけつ[illegible]
国へ海へ海[illegible]へ[illegible]ん此事は必少屋をせあらして
そのうち馬を[illegible]海[illegible]沢[illegible]
正宗申けるい[illegible]
[illegible]
はいりて吉野へを沒[illegible]
[illegible]

奥長（ゆうちう）殿人（ばくと）武家四家を國（こく）々代事を諸門よ
ひとりといへども事ゆへ人もなりうちうなる者よりの陣中
よ雑兵ばかり信雄と　家康ゑと為人（ひとびと）少なく（内）内ゑとし
ゆへ（ゆへ）なりうち武方秀吉（ひでよし）ものなれい秀吉折節ひ
見は敵方ゑ近寄ると（しと）宣ひしうち日　侍者　六人を
使として先　御門反の陣（ばん）ゑて一時斗あ信雄ゑ
事に信雄の陣（ばん）ゑて為兵ゑ事長久ゑ有管ゑて
後話ゑ事中（ちう）自見　信人ゑ雑兵ゑ一陣中ゑ
ちうゑ　物ゑうち秀吉の智ゑ　ふ敵ゑ廻せ為ものは
なりけゑ　ゆゑ信ゑ者ゑの信ゑ軍士も退屈の
ゑ秀吉ゑ引てなりうちとひ踊をあとゑ
なりまして上下幸若を舞れうち秀吉ハ又信雄ゑ家
を賜ふんとて敵ゑ面ゑ建物ゑの臺玉堂ゑ家入ゑ
ゆうち先　家康ゑを招信雄ゑ　ゑ使ゑ細川藤孝入ゑ国丹ゑ外
宮ゑ信雄利休居士ゑ茶ゑうち又信雄ゑ招き細川ゑ真庵ゑ
氏ゑ上杉ゑ家ゑ丹柴腸雅ゑ彼宮入ゑ家ゑ入ゑ
吉安房ゑ信ゑ　せうりゑ　ゑに扇ゑ
唱ゑ

東ゑて鳴釜東鳴釜ノ湯ウ沙（タキル）

武州松山城沒ゑ付　信城沒ゑ事
岡の大將ゑ田上杉ゑ大道寺ゑ夢ゑて先陣ゑ
十二日武州松山城ゑ上野介ゑ

前田へ立ちのき御屋敷を取上げ新敷屋敷囲場を本屋より五間
余程低く山田伊勢守宛の書状を出し家人師年
八民部大輔の三男人吉原前田出大学上杉かくめ家来
毛利主前大膳亮は元の口を囲ミ城の口を八幡を
立へき御屋敷仕置を城北とくに付家臣に成し
六月人数を出し時八ツ半とや出人ひしん矢倉を元て城を乃
命を拾くれい先手加賀口へ引に拾て中丸二丸お
陣屋へ二の丸ハ諸手丸書ハ新敷多本屋
今ハ前田家二万石領地ハ先代侍ふんと俺らり
毛利勝四郎ハ二丸を請れ三の丸ハ書を入毛彼口人を先
手として御城北城へ立へ先中田邪口山城を攻者

に米氏邦ハ家人吉原人ハ立ちしハ御城へ近入ちり
写ハ城ハ御城へ立ちあり見よりさき秀吉の
仕ちて　御門の家人中番与村長ハ年号七郎
兵秀吉ハ毛利豊前守ハ新豊前守和市正
吉野ハ一子ハ安中伊吉和泉ハ上ハの城へ攻せめ
ハ一ハ前田上杉ハ城ハ何て前田攻大勝
ハ城ハ何て

慶長御新城落城之事

前田の北ハ米氏邦ハ后城御新城へ家臣氏邦ハ小田原に
河内家臣上杉ハ井上三河守ハ海村左馬助中書
ハ不付三百本家人雅ハ彼二万七百家人数ハ

さて信濃国衆も徒従仕候ものも御敵を見付候へ
御敵へ加勢利家高名い隆家の者ともを軍勢と
させ高清海を渡て御敵の本より
利家国衆は榛沢野より山おを
山を陣をとり信濃川を中に
はは本より山面茂りなとも切岸なき三千ほもはんと
見えて水をかけ屏風をたてかこむ
かくいくはくの川を隔て敵よりも大なる人数
なれいこれを甘糟を
多ほの寄手
国い今より大道寺
御川
の

御家衆は東山北いくき分搦手を用の下
に入下し大塀柵を打かけられい搦手に
西せよく薙ほりて
に作事させ
十九日より押寄て六月十四日まで
歳内より去よも搦手
ち海北山中日尾搦を
清兵衛田舟搦を
かし合にみて
今は搦くくをを上大道寺
級を入て

御家衆は東山北陣を東山北いくき分搦手を用の下
に入下し大塀柵を打かけられい搦手に
西せよく薙ほりて
に作事させ
十九日より押寄て六月十四日まで
歳内より去よも搦手
ち海北山中日尾搦を
清兵衛田舟搦を
かし合にみて
今は搦くくをを上大道寺
級を入て

城を設し軍を立て其利益加ふ先陣へ向ひ
見られる紀之助多田藤左衛門長兵衛三人
家康公より左よりて御形より出馬へ参られ大者
此方へ左へ城へ城塀の内を乗越て三人の者とも
を召捕へ申しかひ申しとうや
桐別五郎城を出家氏後陣隊三年
三氏秀吉公御門及し後しいなく本国勢出馬
よの多く城より出馬ゆき城は一度も破れいなやあく
三郎北の方諸もやと後しられい御川家公義者の
出馬を三度して後へ向うか多井伊掃部を左て者れ五郎
の城を出家氏後は山中に籠り山中義隆せを面目なく
ふして五郎より籠城し歌書来るは花やうにうち死せんと後
より後へ守何もして氏後を味方にして家来引寄せ
東西は大裏陣家せんとうなく汝ホを出ようやと花ふ
三人も異て出家を立て和多田藤を家ホ数所所
を捨て氏後の伯父の信方辰より知人左色は後より見
氏後和睦あるるは中氏安信し五郎にはし家へ生とく
籠城あるとも何程の事を仕出家一き討死のんろんより
出家滅亡の辰氏後の代は苗系をお續しうは根に光
し後へうれ矢にての陣家より者へと進そえよといひ
られは初花異て五郎へ馬を弛てう辰より対面し毒
後しう辰はんして氏後へいろくすえ上先祖の孝行

なれ屋敷と唐訓に唐れハ氏種も所同じくして和平の五年
中紀品仮て立人ハ北方播磨くと呼れハ方播磨 家康公
中上氏種より人質を出し和平を請引て氏種山面家へ
出て居月余 家康公へ対面し秀吉へ呼ひ秀吉播
磨に到義氏北伐之氏種出馬の長秀吉へ御門原のよき
作家人多事を厚し御ひしとやそれより浅野石田
本村市を以て泗之軍を辛し年玉へ流き堀くを世め
為せし和多中勢を以ふ小牧氏種を出西原家へ
上れハ何も農て退家し山面家を斗之ゆ先を仕戸
伝会古郎年令ハ長西思館林見利関右衛門の堀を
攻さるとや堀くを為て出て陸奥へ加り
しかハ泗方勝ハ泗て今堀ふ堀とてハ館林思若狭八生長
堀牛ふれハ毛笠を攻んとをみかり

上総館林堀切 分堀を陸奥へ

石田三成大長吉隆七年西家東水甲斐守時之堀内蔵書 播磨
地へ村作播磨 雅春中江守 有馬伊東丹後守 重家中務書 氏種
松田安左衛 宗治沢井伯耆守 重勝 中江秀吉 佐竹北家
を攻 加 六月廿二日 館林へ向ひ 堀 東南方八郷鶴
崎とて 屋敷 大長 人馬の五郎左衛門 西家の
北条氏播磨に上て 方を三方に分て 三方分ける
西の大手ハ 石田 思 中江 松浦 上杉 人 警加りて七手家康
和田原と 舞て 佐野に 西大手 向ひ 屋敷北 松浦に陸

東の方加賀志口へ出る大会堂留沢東より降人北路かゝりて五百
六百人（東の方下ガ張口へかゝりめてとして七東脇より村中路伝東
より降人北路かゝりて六百八百人（寄る三方の寄る一万九千四百
強堂を用ひて三度の声をよとり堂を氏紀いにて山より堂一
此堂は寄人（東東因幡守堂代として氏紀ヶ谷下板倉堂
と同下柳谷守因幡地堂を測る上東因幡
守因幡国守堂を朝廷を用因中寄堂
寄る六百百寄因長新堂を西因長新堂を西
此堂より寄る寄のよ寄東長寄て
堂より寄る寄所人（寄陸奥社人（山外寄とかりあつ
めたる降人（三方の寄る（対して降く寄る大郷ちれも
有五百北郷より因長六百百寄を取して日を送る

五百百面を拵れ（対しくさはくより日を送る寄ひけ（
東南の沼を堂を堂を堂国を取て寄りもらとかゝんに大東
桂東人面を寄ちへて寄を郷りて寄ちせの人ゝ堂を
も山寄ちて山百北寄る西せきくるかゝん（祝）堂ゝ堂ハ堂ハ
寄（とゝふ長東も北と因して金藤西も井西てを
留長を沼をしそれ山三方北中に人夫二三万人（出寄り
大東桂東を沼（ちけへく沼より道路郷りへいを
大東を寄中て沼の中（寄中ちりてうち入くく寄わた
郷を六百北中より北を八九百に二郷北道を郷ちり堂を北
道を郷るよハ沼（ヶ会せ三方の寄る寄ひくなれハ
堂を八三方をふせく此時沼のちり郷て竹東付おて

主張より大変絶業すべき時を似ふ城主は面雲を力と
して雲作も南方如何迷惑しより石田恢んて時者に
赤松よりも無理せんと時をより大坂の者ハ如何すべ
用意し時分を待ちて城中より城中ハ北八日北歌中より
松明二三百人一つ人まなくハ二三百人の動揺を者
ちて者ひとし者ハ城中より見ほし人をなし去
よても彩よ塀柵をの用意にやと出ちに城中に
ちも知ちて者ハ方より敵者と人ハて城の城主ハ日
なんと名物の図書をしより武者者ハ城中ハ
城中ハ何者北ハ方ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ世ハ入ハ石田ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
者ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
村木ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ
城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ城ハ

白石等の諸氏八人を遣して曲輪に籠城をすゝめ氏勝
を先祖をうれへて青苔に赤ふきそめあも降参して城を
氏勝に法名紙をも贈り給ひ給へり氏勝の法号をとゝめ
かくやしとい詠くやけをい城をもんうあて降参して籠り
国海に名城を捨て城を出て人数を城へ入る
思の城を捨んと平野に出る高家人の城へ移れり

内閣文庫
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan